

【生薬名】紅花 *CARTHAMI FLOS*

【起源植物】ベニバナ *Carthamus tinctorius*



【科名】キク科Compositae

【別名】紅藍花

【薬用部分】管状花(花びら)、種子(紅花油)

【主成分】脂肪油(リノール酸)、赤色色素

【薬性】気味は辛微苦温、帰経は心肝に属す

【効能】●破瘀活血、通経

●婦人病一般、浄血、動脈硬化予防、3～5gを煎服

●紅花酒は金匱要略で紅藍花酒と記載があり婦人病に使われる

●ベニバナ油として売られている、リノール酸は血中のコレステロール値を下げる

●漢方では花を用いる、脂肪油を取るには種子を使う

●葉子の着色

●大量では活血祛瘀、少量では養血和血

●紅花と桃仁はともに祛瘀の効能があるが血証には桃仁の方が応用範囲が広い

【出典】●紅花 辛温、最も瘀熱を消し、多ければ経を通し、少ければ血を養う。(薬性歌)

●破留血、療血気通。(一本堂薬選)

【備考】●葉に刺のある原種は絶滅近い、日本にしかない

【処方例】●『紅藍花酒』：紅花g ホワイトリカーml 月間熟成

●折衝飲、冠心Ⅱ号方、